

クラシック音楽入門講座

第2講 黎明期からバロックまで

講師：佐藤卓史

2020年2月16日(日) 小手指公民館分館

「普遍性」に特化した、世界に類を見ない音楽「クラシック音楽」。
「西洋音楽」はいかにして「クラシック音楽」になったのか？

1. 古代ギリシャ

その音楽は失われ、断片的な情報のみが伝わる。

- 楽器
 - ・リラ(豎琴):太陽神アポロンの楽器 理性・秩序の象徴
 - ・アウロス(木管楽器):酒の神デュオニソスの楽器 本能・享楽の象徴

- 音楽論

◇ピタゴラス 数比による「協和音程」の発見

鍛冶屋の金槌の音を聴き、金槌の質量が整数比になる2つの槌の音がよく響くことを発見
弦や管の長さでも同様のことを確かめる

※現代科学では音程は「振動数」の比と定義されている。

1:2=オクターヴ 2:3=完全5度 3:4=完全4度 (ピタゴラス音律)

◇「ムジカ」論 (ポエティウス著『音楽教程』による)

- ・ムジカ・ムンダーナ(宇宙のムジカ):天体の運行や季節の移り変わりを統御
- ・ムジカ・フマーナ(人間のムジカ):魂と肉体の調和や人体の脈拍リズムを統御
- ・ムジカ・インストゥルメンターリス(道具のムジカ):音として具現化されたムジカ
(=耳に聞こえる音楽)

- 音楽

即興 古代ギリシャ語の言葉のリズム(長短)と関係していた？

ギリシャ文明滅亡後の古代ローマの音楽については何も知られていない

2. グレゴリオ聖歌(グレゴリアン・チャント)

- 歴史

4世紀頃からキリスト教が急速にヨーロッパに浸透(380年ローマ帝国国教に)

各地でさまざまな典礼方式や聖歌が発生→教皇庁が統一し「お墨付き」を与える

ローマ版統一聖歌=「グレゴリオ聖歌」(教皇【グレゴリウス1世】(在位590-604)に因む)

主要部分の編纂は7世紀~9世紀、欧州全域に広がり12世紀までに他の聖歌を駆逐

- キリスト教の典礼

◇聖務日課(Officium) 毎日定時に行われる祈り

・朝課 ・賛課 ・一時課 ・三時課 ・六時課 ・九時課 ・晩課 ・終課

◇ミサ(Missa) 特別な日に行われる儀式 決まった式次第がある

- ・固有文:典礼内容により言葉が変化 「イントロトゥイス」「グラドゥアーレ」「アレルヤ」など
- ・通常文:1年中同じ言葉 「キリエ」「グロリア」「クレド」「サンクトゥス」「アニュステイ」など

聖務日課・ミサのそれぞれの典礼においてグレゴリオ聖歌が用いられた

- 音楽的特徴

・男声の無伴奏斉唱(ユニゾン)=単声音楽(モノフォニー) ※楽器は禁止

・1オクターヴ内の7音からなる音組織=【教会旋法】(4種、後に6種)

・平明な旋律線 シラブル様式(1音節=1音符)とメリスマ様式(1音節=多音符)の混合

- 記録方法

9世紀頃から聖句の文字上に音程を示す記号→基準音を示す線の追加→

13世紀、4線の【ネウマ譜】が定着(「楽譜」の原型が誕生)

3. グレゴリオ聖歌の変容

- トロース Tropus (水平的拡張) 9~12世紀
メリスマ部分に別の歌詞を挿入(「替え歌」の一種)、また途中で新たな旋律を挿入
- オルガヌム Organum (垂直的拡張) 9~13世紀
聖歌(定旋律)に対旋律(=「ハモリ」)を追加
 - ◇ 平行オルガヌム 完全4度下に対旋律を追加→同度から始まり4度音程に達すると並進行へ
 - ◇ 自由オルガヌム 自由に動く対旋律 1音:1音
 - ◇ 華麗(メリスマ)オルガヌム 定旋律の1音1音を長く伸ばし、10音程度のメリスマ的対旋律

4. ノートルダム楽派 (12世紀後半@パリ・ノートルダム大聖堂)

- 【第4の無名者】が伝えた2人の音楽家=記録に残る最古の「作曲家」?
- ★ **レオニヌス**(レオナン) Leoninus(Léonin) (1135?-1201)
「最高のオルガニスタ(オルガヌム作者)」「『オルガヌム大全』を残した」
- ★ **ペロティヌス**(ペロタン) Perotinus(Pérotin) (12世紀後半)
「最高のディスカントール」「多数のクラウズラ(リズムカルなオルガヌム)を作曲」
2人が同じ聖歌に付けたオルガヌム(『地上のすべての国々は見た』)を比較
シンプルな聖歌を華麗に装飾

5. 中世の世俗音楽

- 吟遊詩人 貴族王族に仕える騎士たち 騎士道・愛・社会風刺などを歌う
- ・ トルバドゥール(フランス南部) 11-13世紀
- ・ トルヴェール(フランス北部) 12-13世紀
- ・ ミンネゼンガー(ドイツ語圏) 12-14世紀 →市民階層に移り「マイスタージンガー」に

6. アルス・アンティクワ (13世紀@フランス)

- 曲種【**モテトゥス**】(モテット)
リズムカルなオルガヌムが独立 各声部が**別々の歌詞**を持つ多声声楽曲
- 記譜法の発達
リズムをより正確に記録する【**定量記譜法**】の開発
3分割(=3拍子)が基本の「完全分割」

7. アルス・ノーヴァ (14世紀@フランス)

- 「不完全分割」=2分割(=2拍子)を積極的に採用する記譜法【**アルス・ノーヴァ**】(新しい作法)
→新時代の音楽潮流そのものを表す言葉に
- ★ **ギヨーム・ド・マシヨ** Guillaume de Machaut (1300?-1377)
アルス・ノーヴァの代表的存在 詩人としても活躍 複雑なリズムと独特の声部進行
自作を「マシヨ写本」として集大成、**作品に自署した初の作曲家**
代表作『**ノートルダム・ミサ曲**』: **ミサ通常文全章**を1人の作曲家が通作した最古のミサ曲
他に世俗曲が多数 『**真実の物語**』:老境にて19歳の少女との恋愛を告白
- **トレチェント** (かつては「イタリアのアルス・ノーヴァ」と呼ばれた)
同時代のイタリアで起きた新たな音楽の潮流 【**トレチェント**】(=「1300年代」)
リズムと多声性に特化したフランスに対し、イタリアでは旋律とその装飾に興味
曲種【**マドリガーレ**】:2声の世俗歌曲 題材は田園・風刺・恋愛など ルネサンス時代に飛躍
- その後の動向
記譜法の複雑化が極まり、理論先行・技巧過多のわかりにくい音楽へ 行き詰まりを見せる

8. ルネサンス音楽（15世紀～16世紀）

● はじまり

★ ジョン・ダンスタブル John Dunstable (1390?-1453)

イギリスでは「3度」「6度」音程を多用した独自の様式が発展（【フォーブルドン】）
理論に基づく「4度」「5度」音程が基本の大陸に新風をもたらした「心地よい響き」
→ルネサンス音楽の方向性を決定づける（【三和音】の萌芽）

★ ギヨーム・デュファイ Guillaume Dufay (1397-1474)

ルネサンス音楽の先駆者 【ブルゴーニュ楽派】（現在の北仏＋ベネルクス地域）の開祖
ダンスタブルの影響 イタリア・フランス各地の宮廷に仕え、国際的な様式を開拓
1つの定旋律からミサ全曲を作曲する【循環ミサ】を確立 定旋律に世俗曲をも転用
同世代のバンショワ(1400?-1460)、その弟子オケゲム(1430?-1495)の【フランドル楽派】へ継承

● 多声音楽の最盛期

★ ジョスカン・デ・プレ Josquin Deprez (1450?-1521)

ダ・ヴィンチ、ミケランジェロと並び称されるルネサンス期最高の巨匠
全声部で模倣を行う【通模倣様式】を確立 圧倒的な音楽構築術 歌詞内容の表現
代表作にミサ『パンジェ・リング』『聖母ミサ』、モテット『ミゼレレ』など

● 掉尾を飾る2人の巨匠

★ ジョヴァンニ・ダ・パレストリーナ Giovanni Pierluigi da Palestrina (1525?-1594)

厳格な規則に則った無伴奏多声書法（ア・カペラ）は【パレストリーナ様式】として後世の模範に
順次進行を基調とした平明な旋律線、簡素・澄明な響き、静的な作風

ルネサンス音楽の到達点 代表作に『教皇マルチェルスのみさ曲』、種々のモテットなど

★ オルランド・ディ・ラッソ（ラッスス） Orlando di Lasso (Roland de Lassus) (1532?-1594)

フランドル楽派の伝統を受け継ぎ、各国で活躍した国際派 生前から高い名声を得た「音楽の王」
明朗で和声的な作風 パレストリーナと並ぶ最後の巨匠 代表作に『エレミアの哀歌』など
この2人が1594年に相次いで死去し、ルネサンス音楽は終焉

● 新たな潮流

◇ イギリスの動向

★ ジョン・ダウランド John Dowland (1563?-1626)

多数のリユート伴奏歌曲（世俗曲）を作曲

代表作『流れよ、わが涙』（涙のパヴァーヌ）は全ヨーロッパで大ヒット

★ ウィリアム・バード William Byrd (1543?-1623)

宗教曲に加えて多数の鍵盤楽曲を作曲 【ヴァージナル】（チェンバロ）の流行

◇ ヴェネツィア楽派@聖マルコ寺院 2対のオルガンと聖歌隊席を持つ聖堂の構造

★ ジョヴァンニ・ガブリエリ Giovanni Gabrieli (1554/57?-1612)

対比的な音響効果を模索 人数＝音量の異なる2群を対比させる【協奏原理】の祖

代表作『ピアノとフォルテのソナタ』：強弱の指示、使用楽器が楽譜に明記された初の作品

◇ フィレンツェの【カメラータ】

貴族邸に集まった文化人たちが「古代ギリシャ悲劇の復興」を企図

語るような歌＋器楽の伴奏＝【モノディ様式】の創始→【オペラ】の誕生

● 宗教改革と音楽

1517年「95ヶ条の論題」で宗教改革を始めたルター

プロテスタントのための新たな宗教音楽の創出が急務

→【コラール（賛美歌）】：会衆が歌う平易なドイツ語の聖歌

和声付けや器楽編曲も盛んに プロテスタント音楽の基礎となる

カトリック側は「トリエント公会議」（1545-1563）を開き対抗改革に乗り出す

トロープスや多重テキストのモテトゥスは「聖歌を傷つけるもの」として禁止

→中世の多声音楽は教会から追放 パレストリーナのシンプルな作風が公会議の精神に合致

9. バロック音楽 (17世紀～18世紀半ば)

●過渡期の作曲家たち

★カルロ・ジェズアルド Carlo Gesualdo (1566?-1613)

半音階を駆使した過激で前衛的な作風 恨み・絶望などの不安定な感情の表出
私生活でも「妻殺し」事件の醜聞など特異な人物として知られる 貴族

★クラウディオ・モンテヴェルディ Claudio Monteverdi (1567-1643)

マドリガーレ集の序文で伝統的な【第1作法】と破格の【第2作法】の分化を表明
代表作にオペラ『オルフェオ』(1607)、『聖母マリアの晩課』(1610)など
ルネサンスの語法から出発し、劇的な表現を追求 バロック時代への橋渡し役

●オペラの発展

- ・ペーリヤカッチーニが活動したフィレンツェ「カメラータ」から、各地で独自の様式が確立
- ・パリ ルイ14世の寵臣リュリ(1632-1687)がフランス宮廷に合致した「音楽悲劇」を創出
- ・ロンドン パーセル(1659-1695)がバロックオペラの最高傑作『ディドとエネアス』を完成
- ・ナポリ A.スカルラッティ(1660-1725)がイタリア各地のオペラ様式を統合

●器楽曲の台頭

声楽から独立 【通奏低音】(数字付きバス)が誕生

◇鍵盤楽器の作曲家たち

★ヤン・ピーテルスゾーン・スウェーリンク Jan Pieterszoon Sweelinck (1562-1621)

フランドル楽派の流れを汲む対位法技法を鍵盤上で展開 「アムステルダムのオルフェウス」
北ドイツオルガン楽派への顕著な影響

★ジローラモ・フレスコバルディ Girolamo Frescobaldi (1583-1643)

ジェズアルドの影響 即興的・劇的な要素を加味
『トッカータ集』序文でテンポ・ルバート(拍節が伸縮する)奏法を提案

★ヨハン・ヤーコプ・フローベルガー Johann Jacob Froberger (1616-1667)

フレスコバルディの弟子 北ドイツ・南ドイツの両オルガン楽派へ影響
さまざまな舞曲を配列した【組曲】(バロック組曲)の基本様式を確立

◇ヴァイオリンの巨匠たち@イタリア

★アルカンジェロ・コレッリ Arcangelo Corelli (1653-1713)

緩急の楽章が交代する【教会ソナタ】、種々の舞曲が並ぶ【室内ソナタ】の様式、
それらを用いた小合奏と大合奏の対比による【合奏協奏曲】の形式を確立
至難な技巧を用いない端麗優美なスタイルで人気を博す

★アントニオ・ヴィヴァルディ Antonio Vivaldi (1678-1741)

「赤毛の司祭」 ヴェネツィア楽派の後継者 コレッリの弟子
独奏と全合奏が交代する【リトルネッロ】形式により【独奏協奏曲】を確立
膨大な作品数で後世に多大な影響 親しみやすい作風で近代バロックブームの火付け役に
代表作に協奏曲集『和声と創意の試み』(最初の4曲が『四季』)、『調和の靈感』など

●ドイツ語圏の作曲家たち

★ハインリヒ・シュッツ Heinrich Schütz (1585-1672) 「ドイツ音楽の父」

ヴェネツィアでカプリエリに師事 劇的なスタイルをドイツ語のテキストに移植
戦争で荒廃するドイツで苦悩を祈りに昇華 プロテスタント音楽の礎を築く

★ディートリヒ・ブクステフーデ Diet(e)rich Buxtehude (1637?-1707)

北ドイツオルガン楽派の代表者 即興的な【プレリュード】と対位的な【フーガ】の対置
コラール編曲では旋律を上声に置き装飾的に変奏
オルガニストとしての名声 J.S.バッハ・ヘンデルをはじめ多くの音楽家の訪問を受ける

★ヨハン・パッヘルベル Johann Pachelbel (1653-1706)

南ドイツオルガン楽派の代表者 旋律的で明朗な作風
コラール編曲ではフレーズごとに区切り対位的処理を行う【パッヘルベル・コラール】
室内楽にも注力し、現在では『カノン』の作曲家として有名(オスティナート変奏+模倣)

次回第3講(3月8日(日))は「後期バロック期の巨匠たち」

J.S.バッハとヘンデルを中心にバロック時代を集大成し次の時代へ繋いだ作曲家たちを取り上げます